分のことだとすぐ赦せるわけですね。すると今度は「いつでもあわててる」と返ってきます。そんなことがあって、お互いに赦し合うということをまたそこで話し合いました。

人間というのは、何か大きな罪を赦されているという体験をしっかりしていないと、なかなか他人を赦せないのではないかと思います。

私たちが人を赦すことのできる原点は、神様から罪を赦されたということです。罪を赦されているという体験をすると、不思議と、「赦されているから、いくらでも罪を重ねていいんだ」という気持ちにはなりません。

赦されているから人を赦そう、赦されているからできるだけ罪を犯さないようにしよう、そういう気持ちになるのです。そういう心も神様が与えてくださっているのだと思います。

冒頭の御言葉には、そういった神様の赦しというものが非常に明確に書かれています。

メッセージ●19

人間は弁解する動物である

神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。

……ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行なっているからです。　（ローマ人への手紙1章20～23節、2章1節）

私たちは多くの弁解をしながら生きているのではないかと思います。

冒頭の聖書の箇所に「弁解の余地がない」という言葉が二回出てきます。

まず、神様の永遠の力と神性は疑う余地がないにもかかわらず、自分の行動を弁解するために「神は存在しない、そんなことはない」と言っている人たちが多いということを指摘しています。

次に、人をさばいている者たちについてです。

「私は間違ったことをしているわけではない。自分も同じことをすれば他の人からさばかれる。悪いのはあの人なのだ」これは通用しないというのです。

聖書に書いてある「弁解の余地」という言葉にはとても深い意味があると思います。私たちは日常生活のなかでも素直に謝るということがなかなかできません。間違いを認めないで、いろいろな理由づけをして弁解をします。

人間の本性と言いますか、これが「罪の性質」ということにつながっていくのだと思います。

私と家内は同じ失敗をよくします。ドアを閉め忘れるということがお互いの欠点なのですが、家内は車のドアを時々閉め忘れます。私は書斎のドアをよく閉め忘れます。

あるとき用事があって車を出そうと思ったら、エンジンがかかりません。「あ、またやったな」と思いました。半ドアになっていて、室内灯がつきっ放しでバッテリーが完全に上がってしまったのです。

そのことを指摘しますと、家内はすぐに謝らないで、「両手に荷物を持っていたので」と弁解をしました。両手に荷物を持っている場合は車のドアを閉めないということであれば、これは大変なことになります。

私はムッとしまして、「まず謝ったらどうだ」と言ってしまいました。少し険悪な空気になりかけましたが、家内が謝ったのでそれはそれで済み、バッテリーの充電をしてもらって事なきを得ました。

ところがその夜、（私たちは書斎を共有しているのですが）寒かったので暖房をつけながら仕事をしておりました。そして、ちょっと用事があって書斎から出たとき、いつものようにドアを閉め忘れてしまったのです。

昼間私に責められたのでそれが少し尾を引いていたのか、「ドア閉めてね」と家内がやや非難がましい声で言いまして、私はそれでまたムッとしてすぐに謝れず、「いや、すぐに戻るから」と言ったのです。

「すぐに戻るから」というのはドアを閉め忘れた弁解にすぎません。そこでなぜ「あ、ごめ

ん」とひとこと言えなかったのかということですね。

両方とも小さなことですが、明らかに自分に非があるにもかかわらず、「両手に荷物を持っていた」とか「すぐに戻るから」という弁解をまずしてしまうというのが人間の罪ではないでしょうか。何とかふたりでこれを克服しようと建設的な話し合いをしまして、

「まず謝罪それから理由を言いましょう」

という、川柳のような標語を掲げるようにいたしました。

私たちは自分にあきらかに誤りがあるにもかかわらず、人から指摘されたとき、特に指摘のなかに非難の心が入っているときに素直に謝ることができない、そういう非常に罪深い性質をもっているのではないかと思います。

弁解から解放されたら本当にさわやかな生活を送れると確信するのですが、なかなかできません。毎朝「今日は謝ろう」と決心して一日を始めてやっとできるというくらい、私たちは弁解します。

職場でもさまざまな過ちを犯します。すると何らかのかたちでそれを指摘されます。そのときに「私は一度も弁解をしたことがない」と言いきれる人はおそらくひとりもいないと思います。

非があるときは素直な気持ちで謝るという習慣を、ぜひつけたいと思います。

第三章　人の計画、神の計画